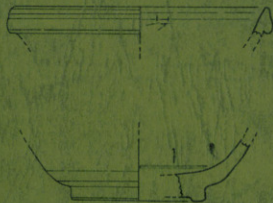


# 河成遺跡

— コメリ H&G 西益田店開発事業に伴う —  
発掘調査報告書



2012年3月  
益田市教育委員会

## 序

本書は、益田市教育委員会が平成22年8月から10月にかけて行った益田市横田町に所在する河成遺跡の発掘調査成果をまとめた報告書です。

横田町は高津川中流域の右岸に位置し、蛇行する高津川の堆積作用によって形成される広大で肥沃な農業地帯の南側に所在しています。本城一帯には益田市の周知遺跡の第1号となる安富王子台遺跡(縄文遺跡)をはじめ、昨今の発掘成果により、弥生時代～中世期に係る家下遺跡・中小路遺跡、羽場遺跡などの重要な遺跡も多く発見されています。

こうした遺跡の集中する状況からは、原始時代から生活域としての好適地であったことを強く窺えるとともに、このたびの調査成果も含め、永い期間に亘る人間活動の営みが徐々に明らかとなってきたといえます。本書が地域の歴史や文化財保護に対する理解と関心を高めるうえで、広くご活用いただければ幸いに思います。

最後になりましたが、調査にあたって全面的にご協力をいただきました事業者である株式会社 コメリをはじめ、土地所有者、地元自治会ほか関係諸機関に厚く御礼を申し上げます。

平成24年3月

益田市教育委員会  
教育長 三浦正樹

## 例言

本書は2010(平成22)年度に、益田市教育委員会が株式会社 コメリの委託を受けて実施したコメリ H&G 西益田店開発事業に伴う河成遺跡の発掘調査報告書である。

1. 発掘調査は平成22年8月23日から同年10月13日まで行っている。また平成23年2月21日には市民学習センター歴史講座で調査の成果報告を行った。
2. 調査に要する経費は、事業者 株式会社 コメリが全額負担した。
3. 発掘調査を行った地番は、島根県益田市横田町2538、2539-1、2540-1、2542、2543、2541-1である。
4. 調査は下記の体制で行った。

調査主体	益田市教育委員会(事務局:益田市教育委員会 文化財課)
調査員	同 主査 山本浩之(当時、主任)
調査補助	同 主任 水津美香、主任主事 大野芳典、主事 佐信昌俊、同 嘱託職員 青木仁美、同 臨時職員 齋藤裕子、三浦竜由美、豊田千恵美、中島雅宏、河野智洋子
調査指導	島根県教育庁文化財課 文化財保護主任 松尾充品
調査助言	元島根大学教授 田中義昭
5. 調査に従事していただいた方々は次のとおりである。(敬称略)。

### ○発掘調査作業

石川偉枝、武田爲久、西坂松子、松本寛子、宮野信和、榎 悟、椋 庄蔵、椋 務、村上博一、  
初山泰廣、山根定男、横田幸和

### ○室内整理作業 青木仁美、世良 啓

### ○遺物実測・ドレーズ化作業 田中義昭氏主宰「いなか舎」会員 福原恭子

6. 挿图中の方位は磁北を示す。また遺構略号のPは柱穴状遺構・SKは土坑状遺構・SXは不明遺構を示し、現位置法により採り上げた遺物についてはPOを付記して表示している。
7. 本書掲載の遺跡出土資料及び実測図、写真等の資料は益田市教育委員会で保管している。
8. 本書の挿図は山本及びいなか舎が担当し、編集及び執筆は山本が行った。

## 本文目次

1. 調査に至る経緯	1
2. 遺跡の位置と歴史的な環境	2
3. 調査の概要	5
(1) 調査区の設定	5
(2) 1区の調査状況	5
(3) 2区の調査状況	6
(4) 13~15区の調査状況	9
(5) 16~19区の調査状況	9
(6) 20~22区の調査状況	12
(7) 23~25区の調査状況	12
(8) 26~28区の調査状況	15
(9) その他の調査状況	15
4. 出土遺物	18
(1) はじめに	18
(2) 実測遺物	18
5. 小 結	25

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	1
第2図 切図	2
第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図	3
第4図 開発地点及び遺跡位置図	5
第5図 調査区配置図	6
第6図 土層・遺構状況図(1)	7
第7図 土層・遺構状況図(2)	8
第8図 土層・遺構状況図(3)	10
第9図 土層・遺構状況図(4)	11
第10図 土層・遺構状況図(5)	13
第11図 土層・遺構状況図(6)	14
第12図 土層・遺構状況図(7)	16
第13図 土層・遺構状況図(8)	17
第14図 出土遺物実測図(1)	19
第15図 出土遺物実測図(2)	21
第16図 出土遺物実測図(3)	22
第17図 遺跡整理図	26

## 表 目 次

第1表 周辺の遺跡一覧	3
第2表 実測遺物観察表	24

## 写 真 図 版 目 次

図版1-1 調査前状況(北から)	27
-2 調査前状況(西から)	27
-3 1-2区 表土掘削状況	27
-4 遺構検出状況(2区・3層上面)	27
-5 13区 遺構検出状況(4層下面)	27
-6 14区 遺構検出状況(4層上面)	27
-7 15区 遺構検出状況(4層上面)	27
-8 16区 遺構検出状況(4層上面)	27
図版2-1 17区 遺構検出状況(3層上面)	28
-2 18区 遺構検出状況(4層上面)	28
-3 19区 遺構検出状況(4層上面)	28
-4 22区 遺構検出状況(4層中面)	28
-5 23区 遺構検出状況(4層中面)	28
-6 25区 遺構検出状況(4層上面)	28
-7 26区 遺構検出状況(4層上面)	28
-8 27区 遺構検出状況(4層中面)	28
図版3-1 i区 北半部の石列検出及び完掘 状況(北から)	
B層(淡茶灰色土)上位面	29
-2 共存遺物(土師器)検出状況(15区)	29
-3 遺物出土状況(20区・4-A層攪乱層)	29
-4 遺物検出状況 (28区・4層下面~5層上面)	29
-5 遺構完掘状況(2区・3層上面)	29
-6 13区 遺構完掘状況	29
-7 14区 遺構完掘状況	29
図版4-1 15区 遺構完掘状況	30
-2 16区 遺構完掘状況	30
-3 17区 遺構完掘状況	30
-4 18区 遺構完掘状況	30
-5 19区 遺構完掘状況	30

図版4-6	22区	遺構完掘状況	30
-7	23区	遺構完掘状況	30
-8	25区	遺構完掘状況	30
図版5-1	26区	遺構完掘状況	31
-2	27区	遺構完掘状況	31
-3	共伴遺物(播鉢)検出状況 (16区)		31
-4	共伴遺物(金属器・陶磁器) 検出状況(27区)		31
-5	2区	遺構検出状況 (5層中位面:北から)	31
-6	遺構表出状況 (2区:SK19:5層中位面)		31
-7	13区	遺構検出(5層中面)	31
-8	14区	遺構検出(5層中面)	31
図版6-1	21区	遺構検出(5層上面)	32
-2	22区	遺構検出(5層中面)	32
-3	23区	遺構検出(5層中面)	32
-4	24区	遺構検出(5層中面)	32
-5	27区	遺構検出(5層中面)	32
-6	共伴遺物(土師器)検出状況 (13区)		32
-7	共伴遺物(土師器)検出状況 (21区)		32
-8	共伴遺物(土師器)検出状況 (28区)		32
図版7-1	SK14完掘状況(2区)		33
-2	遺構完掘状況(2区:北から)		33
-3	遺構完掘状況(2区:P24・25)		33
-4	1区 北半部の土層堆積状況 (南から)		33
-5	1区 中央部の土層堆積状況 (南から)		33
-6	1区 南半部の土層堆積状況 (南から)		33
-7	土層堆積状況 (2区西壁:北から)		33
-8	2区 完掘状況(北から) 5層中位面		33

図版8-1	1区	中央部の完掘状況 (南から)5層上面	34
-2	1区	南半部の完掘状況 (南から)5層上面	34
-3	北端トレンチ掘削及び土層堆積 状況(2区北壁:東から)		34
-4	13区	遺構(調査区)完掘状況	34
-5	14区	遺構(調査区)完掘状況	34
図版9-1	21区	遺構(調査区)完掘状況	35
-2	22区	遺構(調査区)完掘状況	35
-3	23区	遺構(調査区)完掘状況	35
-4	24区	遺構(調査区)完掘状況	35
-5	27区	遺構(調査区)完掘状況	35
-6	3区	調査区完掘状況	35
-7	4区	調査区完掘状況	35
-8	5区	調査区完掘状況	35
図版10-1	6区	調査区完掘状況	36
-2	7区	調査区完掘状況	36
-3	8区	調査区完掘状況	36
-4	9区	調査区完掘状況	36
-5	10区	調査区完掘状況	36
-6	11区	調査区完掘状況	36
-7	12区	調査区完掘状況	36
-8	15区	調査区完掘状況	36
図版11-1	16区	調査区完掘状況	37
-2	17区	調査区完掘状況	37
-3	18区	調査区完掘状況	37
-4	19区	調査区完掘状況	37
-5	20区	調査区完掘状況	37
-6	25区	調査区完掘状況	37
-7	26区	調査区完掘状況	37
-8	28区	調査区完掘状況	37
図版12-1	29区	調査区完掘状況	38
-2	30区	調査区完掘状況	38
-3	実測遺物1		38
-4	実測遺物2		38

## 1. 調査に至る経緯

当初に事業者から平成22年4月20日付け文書で開発計画に伴う分布調査の依頼を受理し、当該地は遺跡包蔵の可能性が高いため試掘調査が必要な旨を回答している。このことにより、同年4月26日～5月6日で試掘調査（B-1～B-4区：第5図）を実施したところ、遺物・遺構の検出により遺跡と確認された。近隣には安富王子台遺跡や大畑（おおばたけ）遺跡・大境遺跡などが既に存在するが、単独での遺跡範囲に止まると推定されたことから、独立した遺跡として扱うこととした（第3図）。広域には大境という地区名に属するが、その地点の地名から河成（こうなり）遺跡と呼称することとし、平成22年5月6日付け益教文第32号で遺跡発見の手続きを完了している（第2図）。

同時に、事業者に対しては調査結果を送付（平成22年5月20日付け益教文第20号）して、開発行為前の本発掘調査の必要性を伝えた上で協力をお願いし、了承して頂いた。その後、県文化財課の助言も踏まえ、数度の協議を重ねる中で益田市教育委員会が受託の上調査を行い、遺跡に直接影響を与える部分（建物基礎及び擁壁・石油タンク埋設部分）についてのみ調査を行うこととなり、調査終了時期は開発着手予定の同年10月初旬を目標とすることとなった。

事業者からは平成22年7月30日付けで第93条第1項に係る埋蔵文化財の届出が提出され、市からは平成22年8月16日付け益教文第79号で埋蔵文化財発掘調査の通知を行っている。同時に、事業者とは平成22年8月2日付けで委託契約を締結の後、平成22年8月23日に現地調査に着手して、同年10月13日には調査が終了することができた。

その後、島根県教育庁文化財課とは、平成22年10月8日付け益教文第108号（建物基礎部分）及び平成22年10月14日付け益教文第117号（擁壁及び灯油タンク埋設部分）をもって遺跡の取り扱いに係る協議を行い、事業者へは平成22年10月12日付け益教文第116号（建物基礎部分）及び平成22年10月22日付け益教文第119号（擁壁及び灯油タンク埋設部分）をもって、調査概要書とともに遺跡の取り扱いに係る協議結果を通知している。

なお現地説明会は行うことはできなかったが、平成23年2月21日には益田市民を対象とした市民学習センター主催の歴史講座において調査の成果報告を行っている。



第1図 遺跡位置図

## 2. 遺跡の位置と歴史的な環境

### (1) 遺跡の位置

益田市は島根県の最西端に位置して山口県と広島県に接し、北は日本海、南は中国山地に至る山陰と山陽を結ぶ交通の要衝地である。東に浜田市、南に津和野町と吉賀町及び広島県安芸太田町と北広島町、西は山口県萩市田万川町に接し、島根県西部では中核都市の1つとして機能している(第1図)。市域は、益田川・高津川の2河川によって形成された平野上に広がる市街地を中心として、平成16年11月1日の旧美都町・旧匹見町との合併によりその規模は拡大し、現在(平成23年12月末)面積約733km<sup>2</sup>、人口50,537人を有する都市となっている。

河成遺跡の所在する横田町は市域西側のほぼ中央部にあたり、高津川と匹見川の合流点右岸一帯に広がる平野部に位置して、北は安富町、西は向横田町となっている。地名の由来は出雲の横田大明神を勧請したからとか、長い田が横に存在するからなどと云われている。

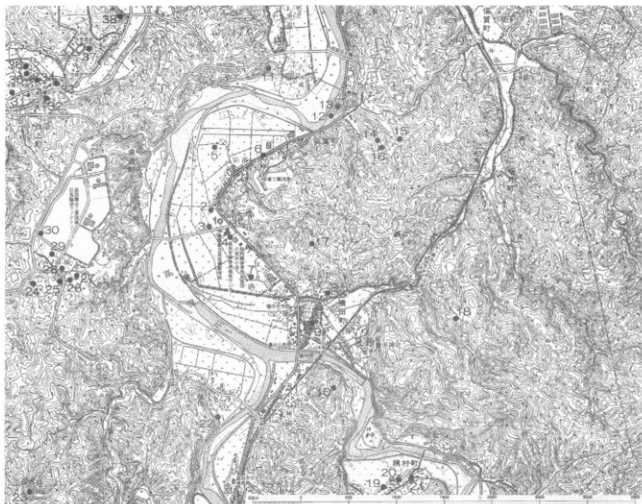
現在は西益田(行政)区うちの横田町、安富町、梅月町、本俣賀町、左々山町で構成される豊田地区に組み込まれ、横田町は人口1,647人、世帯数681戸(平成23年12月末時点)を数える。さらに横田第一・第二・第三と分かれる自治会区にあって、本遺跡地は第三区に属している。また本城は立地的に古くから洪水禍に多く晒されてきた場所であり、慶長7年(1602)から昭和18年(1943)までに18回も及んだという記録が遺っている。



第2図 切図

### (2) 歴史的な環境

本遺跡の所在する豊田地区は原始～古代・中世に係る顕著な遺跡が多く存在しており、隣接する南城の高城地区(神田町、向横田町、隅村町、白岩町、猪木谷町、薄原町)にも遺跡を散見することができる(第3図)。



第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図

番号	遺跡名	種別	概要	番号	遺跡名	種別	概要
1	河成遺跡			20	丸山の柵(市)	天然記録	隅丸山八幡宮境内
2	安富(王子台)遺跡	散布地	縄文・弥生土器、石器	21	隅村窯跡	窯跡	明治末～大正10年、昭和30年～?
3	大塚遺跡	散布地	土師質土器、陶磁器	22	向横田城跡(市)	城跡	山城、曲輪、土塁、空堀、堀切
4	大畑遺跡	集落跡	陶磁器	23	円ヶ森城跡	城跡	山城、曲輪
5	中小路遺跡	集落跡	弥生、古代～中世	24	中村雪太郎窯跡	瓦窯	瓦、明治中期～昭和初期
6	羽場遺跡	集落跡	弥生前～中期、中世	25	石橋窯跡	瓦窯	瓦、明治初期～昭和40年
7	家下遺跡	集落跡	弥生終末期、奈良・平安	26	藤原辰之窯跡	瓦窯	瓦、時代不明
8	上野横穴	横穴	須恵器、刀剣	27	橋目窯跡	瓦窯	瓦、明治初期～昭和42年
9	中世横田市遺跡	その他		28	中村六右衛門窯跡	瓦窯	
10	本郷寺城跡	城跡	山城、曲輪、堀切、堅堀	29	本田窯跡	瓦窯	瓦、陶器、昭和初期～
11	大塚城跡	城跡	山城、曲輪、横堀、堀切	30	藤原窯跡	瓦窯	瓦、陶器、昭和3～12年
12	鷲王子遺跡	散布地	磨製石斧	31	白上古墳(市)	古墳	円墳、横穴式石室
13	安富城跡	城跡	山城、曲輪、堀切	32	中島窯跡	窯跡	明治初～末期
14	奥田古墳群	古墳	積石塚円墳2基	33	竜王寺跡	寺院跡	
15	長原原敷跡	城館跡		34	宮ノ廻遺跡	散布地	須恵器、土師質土器、陶器
16	奥田丸山古墳	古墳	積石塚円墳	35	白上遺跡	散布地	石斧
17	豊田城跡	城跡	山城、曲輪	36	白上館跡	城館跡	曲輪
18	石塔寺権現境内跡	神社跡	神社跡	37	野田窯跡	窯跡	丸物、文政5年～明治初期
19	丸山遺跡	集落跡	土師質土器、陶磁器他	38	吹金原窯跡	窯跡	登り窯、丸物、明治中頃～大正14年

第1表 周辺の遺跡一覧

市内の縄文遺跡は、縄文銀座といわれる匹見町の他には、遺跡至近の安富町の安富王子台遺跡から縄文後期後半～晩期に至る土器が発見されている。また弥生時代には同遺跡から弥生前期土器や、その至近の羽場遺跡では弥生中期土器の多数出土した環濠や土坑墓、中小路遺跡では弥生中期～後期に係る遺物に伴う堅穴住居跡や土器棺墓など、そして横田町の家下遺跡からは弥生終末期土器などが多くみられるなど、高津川中流域平野には永続した大集落の営みを窺うことができる。

古墳時代に入ると、本地区に奥田古墳群（円墳）や上野横穴などがみられ、また律令制下では市域に美濃郡の誕生をみるが、八郷に分割されるうちの大農（おおの）郷に現在の西益田（行政）区の大部分が相当すると考えられる。そして平安末期以降は長野庄などの荘園へと推移していく過程の中で、前述の中小路遺跡からは官衙的要素の強い遺構群も検出されるなど地域拠点的な集落様相を窺わせるとともに、家下遺跡でも奈良～平安期に係る遺物などが多くみられている。

鎌倉以降の中世期には、益田氏や吉見氏及び諸氏の入部に従って同地にも彼らの所領支配が及ぶようになる。詳細は不明だが、中世期を通じて二氏を中心とした所領の争奪が繰り広げられた地であったと伝えられ、最終的には益田氏に帰したという。同域には安富城跡、豊田城跡、本郷寺城跡、向横田城跡などの山城が多くみられ、彼らの残跡を偲ばせている。

なお、中小路遺跡や羽場遺跡などから出土した多くの貿易陶磁器類や石塔寺権現経塚出土の鎌倉初期頃と推定される中国製陶製経筒（豊田神社蔵、県指定文化財）などからは、当該期における土豪（地侍）級勢力の存在や流通・交易の様相、そして仏教文化の浸透状況などを窺える好資料といえる。また、遺跡地点の至近には大境遺跡（散布地）や大畑遺跡（集落跡）がみられ、中世から近世に係る土師質土器や陶磁器なども確認されている。

藩制期に入ると、他所へ転封となった益田氏や吉見氏の旧領地はそれぞれ浜田藩領・津和野藩領に再編されることになり、本遺跡の所在する豊田地区は江戸期を通じて後者に属することとなった。なお近世以降では、遺跡地の西～北西側に瓦窯などの窯跡が多く確認されている。

参考文献：矢富熊一郎『益田市史』昭和38年発行

矢富熊一郎ほか『益田市誌（上巻）』昭和50年発行

『日本歴史地名大系第三三巻 島根県の地名』平凡社 1995年発行

神本常吉『日原町史（上巻）』昭和39年発行

神本常吉『津和野町史（第一巻）』昭和45年発行

石西郷土史及び視史編集委員会『石西ものがたり 租税とくらし』平成10年発行



#### 4. 遺跡の概要

##### (1) 調査区の設定

調査対象地は、島根県益田市横田町2538番地ほかに所在し、そこは大字名「大境（一）」といわれるうちの地名（小字名）が河成（こうなり）と呼称される場所である。内湾する高津川右岸に形成される平野部に在して、山裾を北西-南東方向に貫通する国道9号線沿いに立地する。指呼範囲には南側に県立美護学校が存在し、そこは周知遺跡の大畑（おおばたけ）遺跡であり、また西側には大境（おおざかい）遺跡、そして北側には安富（王子台）遺跡といった3遺跡に囲まれた水田地で、現地表面標高は13440m～13550mを測っている（第3・4図、図版1-1・2）。

調査区については、道路沿いの擁壁部分を1区、灯油タンク部分を2区、建物施工基礎部分は北端から時計回りに3区～30区として設定し、重機での表土除去後に手作業で掘削及び精査を行った。また各調査区の形状は、1区は幅1.2m×長さ約76.0mのトレンチ状、2区は約8.3m×約14.0mの方形状、3区～30区は1辺0.8m～2.2mを測る方形状を呈し、最終調査面積は358.08㎡となっている（第5図）。

なお検出遺構は、柱穴状（P）のもの29基、土坑状（SK）のもの22基、溝状（SD）のもの2基、特殊（不明）なもの（SX）2基が確認されている。以降、調査区ごとに詳述することとする。



第4図 開発地点及び遺跡位置図

##### (2) 1区の調査状況

本区は水路・電柱や土地境界標石などの分断地点を境に、北側から北半部・中央部・南半部と分名している。土層・遺構状況は第6図のとおりで、遺物は北半部に集中して近世以降の陶磁器類（第15図33・34・36）がみられるといった状況であった。但し、古代に係る須恵器（第14図10）なども中には散見できる状況であった。東側には水路（溝）が敷設されるが、築造時の青灰色系粘土（A-1～4）や補強用の小礫などが水路下に沿って全長的にみられるとともに、4層（田圃等床面）とした淡赤褐色土は中央部から南半部にかけてはやや脆い淡黄灰色粘土へと変質して厚く堆積していく状況が窺われた（図版7-5～6・8-1～2）。

また北半部には4層上面にB層が確認されて、この上位面からは唯一の遺構となる石列の検出（3-1）とともに、南端域には池底と推定される土層（C～E層）も確認されている（図版7-4）。

全体的に道路や水路造成等の開発行為の影響が考えられる中で、唯一北半部は住居等の可能性を推測できるものである。層位状況から5層以前の構築と考えられる石列は、建物の境界もしくは礎石的なものとも推測されるが性格は不詳であり、共伴する遺物からは近世以降のものとして扱っている。



第5図 調査区配置図

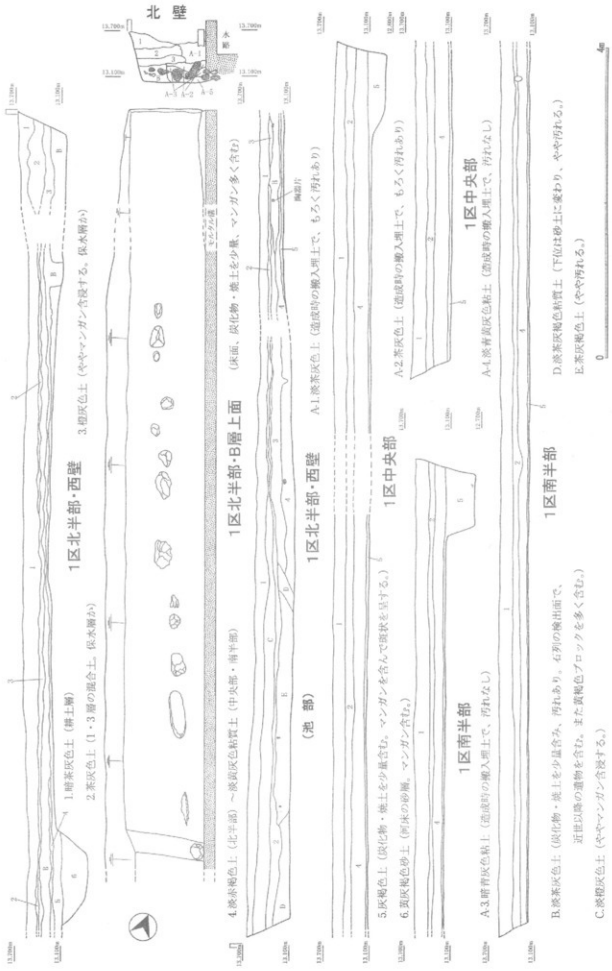
### (3) 2区の調査状況

本区の土層・遺構状況は第7図のとおりであるが、図示はしていないものの3層上位面からは溝状遺構(SD01)が検出されている(図版1-4・3-5、第14図23)。4層までが耕作に伴う土層と捉えられることから、新しい時期の可耕痕として扱っている一方、同層下位面からは東壁沿いにSK14(図版7-1)が確認されて、恐らくは紙漉き等に関わるコガの設置痕と推測される時期の新しいもの。

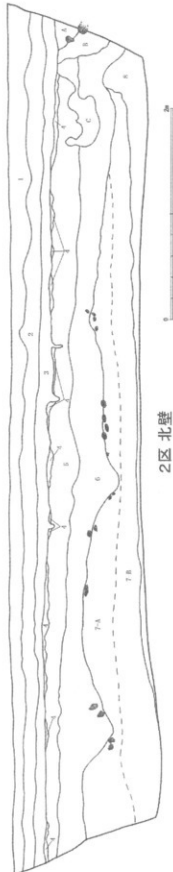
出土遺物は2~4層までで近世以降の国産陶磁器類(第14図19)が主体となるが、中には土師質土器(第14図17)や土錘(第16図41・42)、瓦質土器(第14図11)、須恵器(第15図31)なども散見できる。

層位的には4層及び5層上位面に土師質土器(第14図16)・貿易陶磁器類などの中世遺物を中心に出土することから、4層下位面~5層上位面を中世期のものとして位置付けており(図版7-7・8-3)、後述する3~30区の層序にほぼ共通するものである。とくに北端トレンチ西壁の5層上位面では、青磁(第14図3)や国産陶器の挿鉢とともに鍛冶関連の羽口(第16図49;北側には鍛冶屋という地名も遺る)なども確認されている。

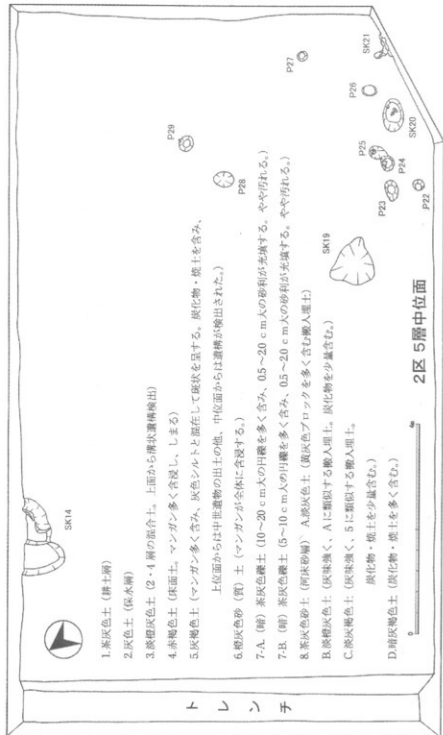
5層中位面からは南端域に集中してPやSKが10基余り検出されている。遺構陥入土(D)は焼土や炭化物を多く含んで、土師器・土錘などを中心とした中世遺物を伴うものがほとんどであり、坑径はSK19(図版5-6)の約0.8mを除く0.3~0.6m、深さは0.2~0.4mを測るものが大半を占めている。恐らくは当該期に係る建物関連跡と推定できるが、本来の構築面はさらに上位にあったものと考えられ



第6図 土層・遺物状況図 (1)



2区北壁



2区 5層中位面



- 1. 茶灰色土 (粘土層)
- 2. 灰色土 (粘土層)
- 3. 炭煙灰色土 (2・4層の混合土。上面から層状濃縮抽出)
- 4. 赤褐色土 (床面土。マンガン多く含浸し、じまる)
- 5. 灰褐色土 (マンガン多く含み、灰色シルトと混在して砥状を呈する。炭化物・焼土を含み、上面からは中世遺物の出土の他、中位面からは遺構が検出された。)
- 6. 煙灰色砂 (質) 土 (マンガンが全体に含浸する。)
- 7-A. (層) 茶灰色礫土 (10~20 cm大の円礫を多く含み、0.5~20 cm大の砂利が充填する。やや汚れる。)
- 7-B. (層) 茶灰色礫土 (5~10 cm大の円礫を多く含み、0.5~20 cm大の砂利が充填する。やや汚れる。)
- 8. 茶灰色砂土 (湖床砂層) A. 煙灰色土 (黄灰色ブロックを多く含む層入層土)
- B. 炭煙灰色土 (灰味強く、Aに類似する層入層土。炭化物を少量含む。)
- C. 炭灰褐色土 (灰味強く、5に類似する層入層土。炭化物・焼土を少量含む。)
- D. 暗灰褐色土 (炭化物・焼土を多く含む。)

トシノ子



2区西面

第7図 土層・遺構状況図(2)

(図版5-5・7-2・3・8)、4層までの構築時期に過度の削平を受けたものと考えられる。

なお北端トレンチの状況からは、下位には砂層(6・8層)や礫層(7層)が互層して河床に伴うものと推測されるが、同時に古くには高津川が接近したと考えられるものである。とくに6・7層は南西側に向かって上昇する傾向が窺われ、また同層に汚れも含まれることから、南西域は当時は微高地を呈し、南もしくは南東方向からの氾濫(濁流)が繰り返された可能性も推測として窺えるものであった。

#### (4) 13～15 区の調査状況

本3調査区は建物基礎範囲の南東端部に位置し、土層・遺構の調査状況は第8図のとおりであり、基本的な層序は1・2区とほぼ共通のものである。他区の調査状況と鑑みて、5層以下は河床に伴う層位と判断されたために調査は本層で止めている。

出土遺物は4層(田圃床面)までで近世以降を主体とするもの、5層中位面までで中世を主体とするものに分かれ、前者は国産陶磁器が多く、後者は土師質土器が大半を占めている状況であった。

検出される遺構は大きく2期に分かれており、4層上位及び下位面からと5層上位～中位面にそれぞれ確認されている。1・2区及び他区の状況と比較して、凡そ4層は近世以降、5層上位面は中世の構築と想定される中で、まず13区の4層下位面にSK01・02の2基(図版1-5)、14区と同層上位面にP09・10の2基とSK11・12の2基(図版1-6)、15区と同層上位面にP01の1基とSK03の1基(図版1-7)がそれぞれ確認されている(図版3-6・7、図版4-1)。坑径はPが0.3m前後、SKが0.4～0.6m、深さは0.1～0.3mを測るものが大半であり、陥入土(A)は暗灰褐色土を呈して、灰味が強く、炭化物・焼土を少量含むものであった。

また共存する遺物もみられ、13区・SK01の唐津焼の播鉢(第15図39)などの近世以降に係る国産陶磁器類が多い中、15区のSK03(図版3-2)やP01(第14図13・14)からは土師質土器などが確認されている。

なお13区の遺構検出面は下位であることから中世の構築に係る可能性をもつとも考えられ、その際には共存する近世遺物は混入したものと推測される。そして15区のSK03からは多くの土師質土器が確認されるが、検出面が上位であるために比較的新しい時期のものである可能性も窺えるものであった。

一方5層では、13区と同層中位面にP12～15の4基とSK15の1基(図版5-7・6-6)、14区と同層上位面にP16の1基(図版5-8)がそれぞれ検出されている。坑径はPが0.3～0.4m、SKが0.6m前後、深さは0.1～0.4mを測り、陥入土はAと類似して暗味が強く、炭化物・焼土を少量含むものであった(図版8-4・5、10-8)。

このように近世以降・中世に係る遺構・遺物の検出からは、当該型における建物等の痕跡とみられ、集落的な様相を窺うことができた(以降、略)。

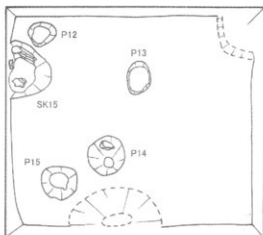
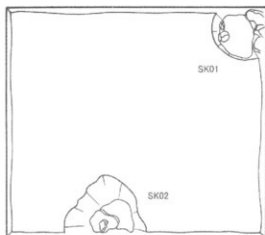
#### (5) 16～19 区の調査状況

本4調査区は建物基礎範囲の南端部に位置し、土層・遺構の調査状況は第9図のとおりである。基本的層序及び掘削状況は、19区を除き前述区と共通するものである。

出土遺物は2～4層(田圃床面)までで近世以降を主体とするもの(第14図25・第15図37)、5層中位面までで中世を主体とするものに分かれ、19区以外はいずれも少量であり、前者は国産陶磁器、後者は土師質土器が大半を占めている状況であった。

19区は3層が分層して4層が厚く、5層に大小の円礫が充填して攪乱する点が他区と様相を異にしている。後述する20区と共通する部分も多く、恐らくはこの限られた範囲において、少なくとも3度の田圃の再造成等が行われたことや、河川等の影響を大きく受けた可能性も高いと思われる。

検出遺構は近世以降と捉えられる3～4層のみ確認できるもので、16区は4層上位面からP02の1基(図版5-3)とSK04の1基(図版1-8)、17区は3層上位面からP03の1基とSK05の1基(図版2-1)、18区は4層上位面からP04・05の2基とSK06の1基(図版2-2)、19区はP06の



13.700m 13区 4層下位面

13.730m 13区 5層中位面

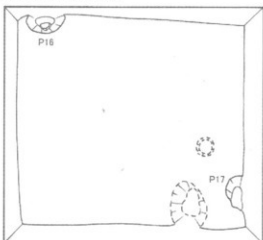
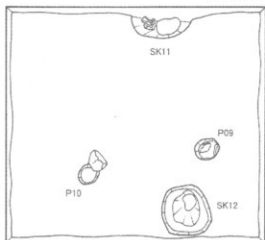
A. 暗灰褐色土 (灰味が強く、炭化物・焼土を少量含む。)



13.160m 13区 北壁

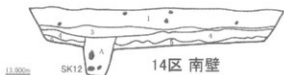
13.190m 13区 東壁

B. 黄灰褐色土 (焼土と思われる黄褐色ブロックを多く含む。)



13.720m 14区 4層上位面

13.750m 14区 5層上位面



13.820m 14区 南壁

13.800m 14区 西壁



15区 4層上位面

1. 灰色土 (耕土層)

2. 淡灰色土 (保水層で、ややしまる。)



13.870m 15区 北壁

13.700m 15区 東壁



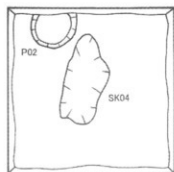
3. 淡橙灰色土 (2・4層の混合土。かたくしまる。)

4. 赤褐色土 (床面土で遺構検出面。マンガンを多く含浸し、かたくしまる。)

5. 灰褐色土 (マンガンを多く含み、灰色砂質土と混在して斑状を呈する。)

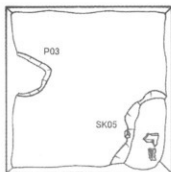
炭化物・焼土を含み、中位面からは遺構を検出。)

第8図 土層・遺構状況図(3)

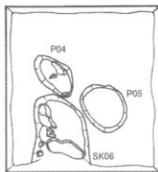


16区 4層上位面

13,700m



17区 3層上位面



18区 4層上位面

13,700m



16区 南壁

13,500m



16区 西壁

13,200m



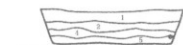
17区 北壁

13,700m



17区 東壁

13,200m



18区 南壁

13,700m

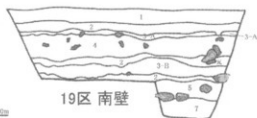


18区 西壁

13,100m

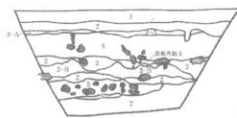
13,700m

13,700m



19区 南壁

12,600m

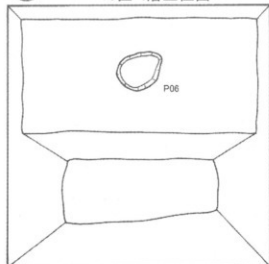


19区 西壁

12,600m



19区 4層上位面



1. 灰色土 (耕土層)
2. 淡灰色土 (保水層で、ややしるる。)
3. 淡橙灰色土 (2・4層の混合土。かたくしるる。)
- 3-A. 同上 (黄橙色ブロックを部分的に含む。)
- 3-B. 同上 (赤褐色マンガンをやや多く含む。)
4. 赤褐色土 (床面土で遺構検出面。マンガンを多く含浸し、かたくしるる。)
5. 灰褐色土 (マンガンを多く含み、灰色砂質土と混在して斑状を呈して、炭化物・焼土を含む。19区は10~15cm大の円礫を多く含み、0.5~2.0cm大の小礫が充填する。)
6. 赤褐色 (砂) 土 (砂質系で、マンガンを多く含浸する。)
7. 暗黄灰色砂土 (河床砂層)

0 3m

第9図 土層・遺構状況図 (4)

1基(図版2-3)がそれぞれ確認されている。坑径はPが0.4m前後、SKが0.6~0.7m、深さは0.1~0.4mを測って、Pは浅めのものが多かった(図版4-2~5・11-1~4)。なお19区の2・3B・4層からは国産陶磁器類や瓦が多く出土している(第15図32)。

#### (6) 20~22区の調査状況

本3調査区は建物基礎範囲の南西端部に位置し、土層・遺構の調査状況は第10図のとおりである。基本的層序及び掘削状況は、20区を除き前述区と共通するものであり、当該区に存在する4-A層は19区の3層とも類似する攪乱層で遺物を多く含む土層となる。また20区は全調査区中で最も出土遺物の多い区でもある。

出土遺物は4層(田圃床面)までで近世以降を主体とするもの、5層中位面までで中世を主体とするものに分かれ、前者は国産陶磁器が多く、後者は土師質土器が大半を占めている状況であるが、20区については、4-A層までに近世以降の国産陶磁器類(第14図18・20~22、第15図27・28・35・38、第16図40・43)・鉄滓(第16図48)・瓦を多く含むほか、貿易陶磁器類(第14図7)・瓦質土器(第14図15)・土師質土器などの中世遺物も混在する状況であった(図版3-3・11-5、第10図)。

検出遺構は大きく2期に分かれており、4層中位面からと5層上位~中位面にそれぞれ確認されている。他区と共通して凡そ4層は近世以降、5層上位面は中世の構築と想定される中で、まず22区の4層中位面にP07の1基(図版1-5)が確認でき、その坑径は0.3m前後、深さは0.4mを測っている(図版2-4・4-6)。

また5層では、21区と同層上位面にSX02の不明遺構1基(図版6-1)、22区同層中位面にP18・19の2基とSK16・17の2基(図版6-2)がそれぞれ検出されている(図版9-1~2)。陥入土(A)はいずれも暗灰褐色を呈して灰味が強く、炭化物・焼土を少量含むものであった。

坑径は、Pは0.3m前後、SKは0.5~1.1m、SXは3つの切り合いと考えられるが0.4~0.8m、深さは0.2~0.4mを測るものであった。とくにSX02とSK16は機能的用途は不詳であるが、前者には共伴遺物として12cの白磁碗(第14図1)や5cの土師器の高坏(第16図45・図版6-7)なども確認されている(図版9-1~2)。

#### (7) 23~25区の調査状況

本3調査区は建物基礎範囲の西端部に位置し、土層・遺構の調査状況は第11図のとおりであり、基本的層序及び掘削状況は前述区と共通するものである。

出土遺物は4層(田圃床面)までで近世以降を主体とするもの、5層中位面までで中世を主体とするものに分けられるが、前者は国産陶磁器類に加え、後者にみられる土師質土器・貿易陶磁器類(第14図5・9)も比較的出土する傾向を看取でき、また後者には古代の土師器(第16図44)も検出されるなど、後世における中世構築面の削平・破壊に伴う混在と推測されるものであった。

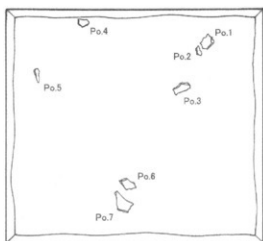
検出遺構は大きく2期に分かれており、4層上位~中位面からと5層中位面にそれぞれ確認されている。他区と共通して凡そ4層は近世以降、5層上位面は中世の構築と想定される中で、本域においては出土遺物の状況からは近世・中世の区分けの困難な場所でもある。

まず23区の4層中位面からはSK07の1基(図版2-5)、同区の5層中位面からはP20の1基とSK18の1基(図版6-3)がみられるが、後者はSK07の坑底の遺存部分として扱うべきものかもしれない。また24区の5層中位面にはP21の1基(図版6-4)、25区の4層上位面にはSK06の1基(図版2-6)がそれぞれ確認されている(図版4-7~8・図版9-3~4・図版11-6)。

北側に向かうにしたがい遺構は疎となる様相を看取できるが、坑径はPの0.2~0.4m、SKは0.4~1.0m、深さは0.1~0.3mを測るものであり、遺構内には23区のP07-2に伴う青磁碗(第14図2・8)のように中世遺物も確認できる。

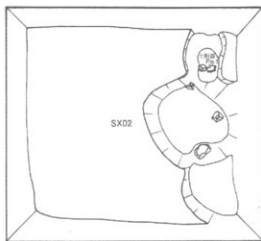
なお層位的には、25区をみると北側に向かうにしたがい、5層は薄層となる反面、6層(河床礫層)





13,700m 20区 4-A層上位面

1.灰色土(耕土層)



13,700m 21区 5層上位面

2.淡灰色土(保水層で、ややしまる。)



13,700m

20区 北壁

13,700m

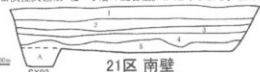


13,700m

20区 東壁

13,700m

3.淡橙灰色土(2・4層の混合土。かたくしまる。但し20区では黄褐色を呈して、真砂土がブロック状に陥入する。)



13,000m

21区 南壁

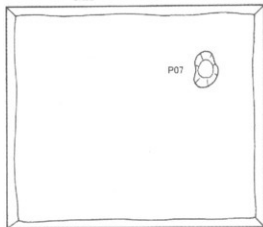
13,000m



13,000m

21区 西壁

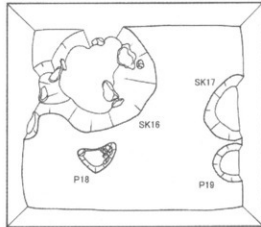
13,000m



13,700m

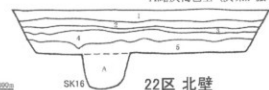
22区 4層中位面

A.暗灰褐色土(灰味が強く、炭化物・焼土を少量含む。)



13,700m

22区 5層中位面



13,800m

22区 北壁

13,800m



13,800m

22区 東壁

13,800m

4.赤褐色土(床面土で遺構検出面。マンガンを多く含浸し、かたくしまる。)

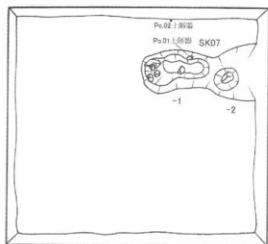
4-A.淡灰褐色土(攪乱層で灰味強く、マンガンを多く含浸する。近世以降の遺物を多く含む。)

5.灰褐色土(マンガンを多く含み、灰色砂質土と混在して斑状を呈する。炭化物・焼土を含み、

上~中位面からは遺構を検出。下位は暗黄灰色砂土へと変化する。)



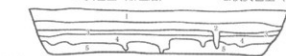
第10図 土層・遺構状況図(5)



13.200m 23区 4層中位面

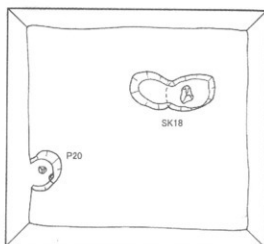
1. 灰色土 (粘土層)

2. 淡灰色土 (保水層で、ややしるる。)



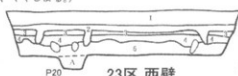
13.100m

23区 南壁



23区 5層中位面

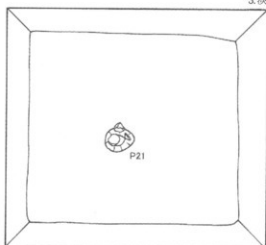
13.100m



13.100m

23区 西壁

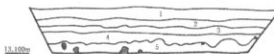
3. 淡橙灰色土 (2・4層の混合土。かたくしるる。)



13.200m

24区 5層中位面

4. 赤褐色土 (床面土で遺構検出。マンガンを多く含浸し、かたくしるる。)



13.100m

24区 北壁



13.100m

24区 東壁

13.700m

5. 灰褐色土 (マンガンを多く含み、灰色砂質土と混在して斑状を呈する。炭化物・焼土を含み、上～中位面からは遺構を検出。下位は暗黄灰色砂土へと変化する。)

13.700m



13.000m

25区 南壁



13.000m

25区 西壁

6. 茶灰色小礫土 (河床礫層。15 cm～人頭大の円礫を多く含み、0.5～2.0 cm大の小礫が充填する。)

A. 暗灰褐色土 (灰味が強く、炭化物・焼土を少量含む。)



第11図 土層・遺構状況図(6)

の位置が上昇する傾向が窺えるものであった。

#### (8) 26～28 区の調査状況

本3調査区は建物基礎範囲の北西端部に位置し、土層・遺構の調査状況は第12図のとおりであり、基本的層序及び掘削状況は前述区と共通するものである。

出土遺物は4層(田圃床面)までで近世以降を主体とするもの、5層中位面までで中世を主体とするものに分けられるが、前者は国産陶磁器類(第15図26・29)・鉄器(第16図47)、後者は土師質土器(第14図12・図版3・4)・貿易陶磁器類(第14図4)も散見できる状況を取次でき、中でも朝鮮王朝陶器碗(第15図30)の検出は珍しいといえ、市内では中須西原・東原遺跡に多くをみることができる。また5層面に中世遺物(土師質土器等)が検出される北限は28区となる(図版6・8・11・8)。

検出遺構は大きく2期に分かれており、4層上位～中位面からと5層中位面にそれぞれ確認されている。他区と共通して凡そ4層は近世以降、5層上位面は中世の構築と想定される中で、4層からは26区と同層上位面にP08・09の2基とSK09の1基、SD02の1基(図版2・7)が、27区と同層中位面にはP11の1基とSK13の1基(図版2・8)がそれぞれ確認されている(図版5・1～2・11・7)。

また5層からは、27区と同層中位面からSK22の1基とSX01の不明遺構1基(図版6・5)が確認されている(図版9・5)。

坑径はPの0.16～0.2m、SKは0.4～0.9m、SXは1.4m前後、深さは0.1～0.35mを測るものであり、共存遺物として27区のSK13検出最上面に肥前系陶器杯(第14図24)と銅碗片(第16図46・図版5・4:仏具か)が、また坑内には青磁皿(第14図6)が確認されている。

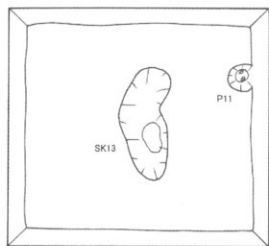
なお層位的に、26・28区には5層以下は大小の円礫を多く含み、河川の影響を強く受けた様相を窺うことができた。

#### (9) その他の調査状況

本文では3区～12区及び29・30区(建物基礎部分の北端～東端部中位置範囲)を採り上げるもので、土層・遺構の調査状況は第13図のとおりで前述区とほぼ共通し、遺構は未検出の区域となる(図版9・6～8・10・11～7・12・1～2)。

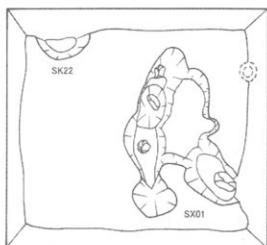
このうち西側の5区と11区には、4層以下に攪乱を呈して大小の円礫が充填するとともに、北端の29区も同層位にやや大型の円礫が多くみられる様相が窺われる。このことより、東側もしくは南東側から北西側もしくは北側に向けて、5層の構築時期もしくはそれ以前に、洪水等の河川による大きな影響を受けたものと想定している。

なお、中世以降も洪水等は多分にあつたはずであり、遺構が未検出のために断定はできないが、2区の南西城から13区～27区範囲までに集落の展開を仮定すれば、洪水により集落を分断された可能性も否定はできないものと推測している。



13,700m

27区 4層中位面



13,700m

27区 5層中位面



13,100m

27区 南壁



13,100m

27区 西壁



13,700m

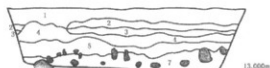
26区 4層上位面

1. 灰色土 (耕土層)
2. 淡灰色土 (保水層で、ややしまる。)
3. 淡橙灰色土 (2・4層の混合土。かたくしまる。)
4. 赤褐色土 (床面土で遺構検出面。マンガンを多く含浸し、かたくしまる。)
5. 灰褐色土 (マンガンを多く含み、灰色砂質土と混在して斑状を呈する。炭化物・焼土を含み、上～中位面からは遺構を検出。)
6. 茶灰色 (上半)～黄灰色 (下半) 砂土 (河床砂層)
7. 茶灰色小礫土 (河床礫層。15cm～人頭大の礫を多く含み、0.5～2.0cm大の小礫が充填する。)
- A. 増灰褐色土 (灰味が強く、炭化物・焼土を少量含む。)



13,000m

26区 北壁



13,000m

26区 東壁

28区 5層上位面



13,700m

28区 南壁

12,700m



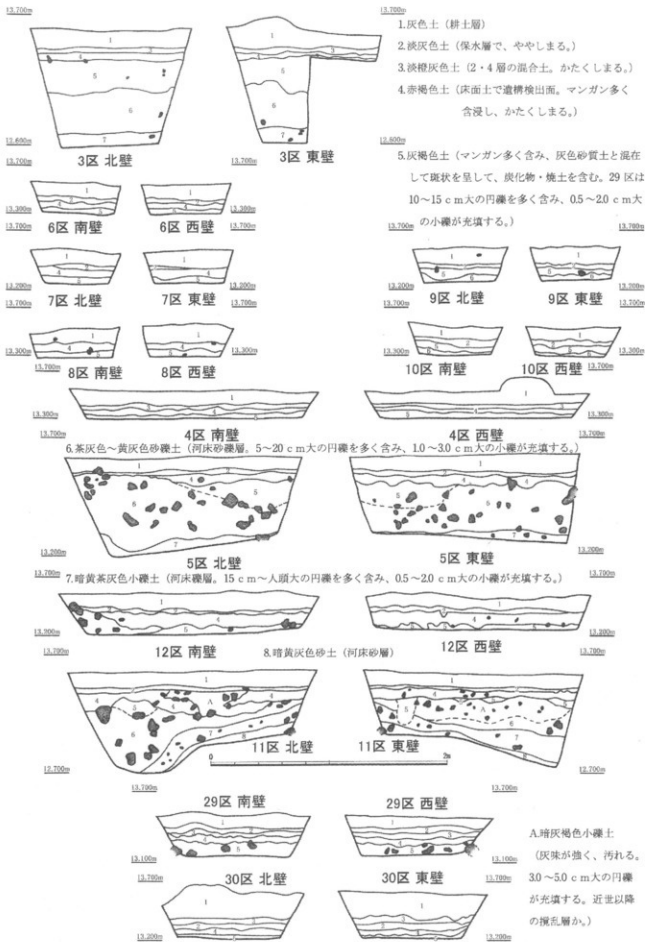
13,700m

28区 西壁

12,700m



第12図 土層・遺構状況図(7)



第13図 土層・遺構状況図(8)

## 4. 出土遺物

### (1) はじめに

本発掘調査では、基本的に土層ごとに遺物を一括して採り上げていますが、特徴的なものについてはP o 番号を附して元位置記録法に従った採り上げを行っている。

出土遺物の総数は約 660 点を数えている。内訳は土師器の 288 点 (約 44%) が最多であり、次いで陶磁器類が 239 点 (約 36%) を占め、うち貿易陶磁器類は 1 割程度が確認されている。そして金属類 46 点 (約 7%)、瓦類 28 点 (約 4%) と続き、ここまでで全体の 9 割以上を占めており、この他に土鏃、須恵器、羽口 (鍛冶関連遺物) などが僅かに散見できる。

遺物の構成時期は上層と下層からのものに大別される。上層 (2 層～4 層上位面) からは中世期の土師器を含む地点もみられるが、主体的には近世以降の陶磁器類が大半を占め、また下層 (4 層下位面～5 層中位面) からは古代のものも僅かに含み、主体的には中世期の土師器が大半を占める状況であった。

以下、特徴的な資料を中心にみていくこととしたい。

### (2) 実測遺物

1～9 は中世前期を主体とする貿易陶磁器で、いずれも胎土は緻密であり、1・7 は白磁、それ以外は青磁となる。このうち 1～3・9 は碗で、それ以外は皿である (第 14 図・第 2 表)。1 は 21 区の S X 3 に共伴するもので、釉調は薄灰オリーブ色を呈し、白磁碗 IV 類に比定される 12 c のもの。体部は逆「ハ」字状に開き、玉縁状の口縁部へと続く。2 は 23 区の S K 07-2 に共伴するもので、釉調はオリーブ灰色を呈し、12～13 c と推定される龍泉窯系青磁碗である。体部は内湾気味に大きく開き、内面の底と体部の境に段を有し、外面には蓮弁文がみられる。3 は龍泉窯系青磁碗 I 類で釉調はオリーブ灰色を呈し、2 区トレンチの 5 層上部に出土したもの。低い高台をもち、底部から体部へは強く湾曲して移行する。内面の底部と体部の境に圏線、草文を有する。

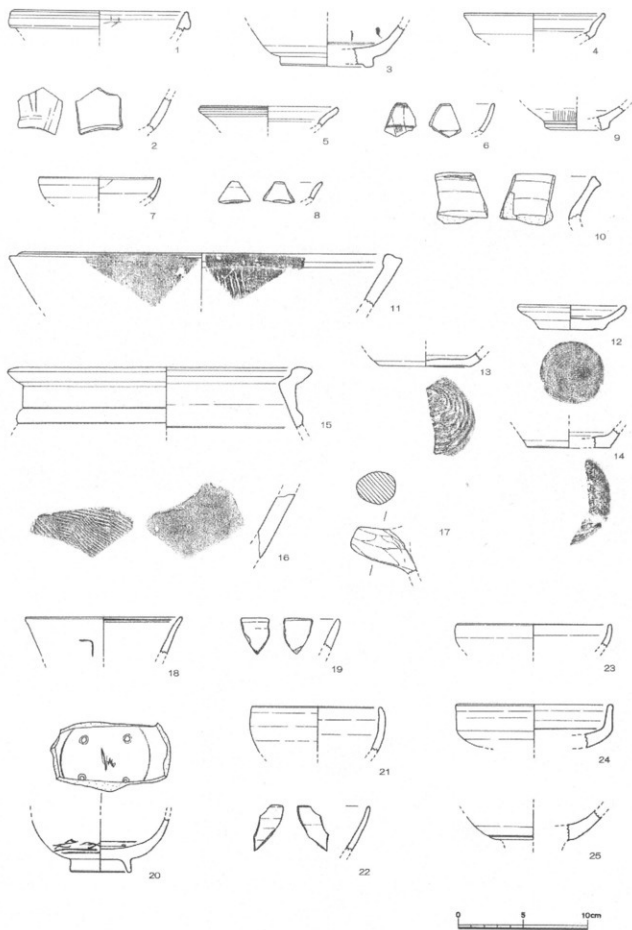
4～6 は釉調がオリーブ灰色を呈する同安窯系青磁皿で、うち 4 と 5 は I 類に比定される 12 c のもの。4 は 28 区の 4 層下面から出土したもので、底部と体部境は屈折して、体部は逆「ハ」字状に開いている。口縁端部はごく僅かに内傾して尖り、また内面の底と体部境に段を有する。5 は 24 区の 2 層上面から出土したもので、体部から口縁部は外反気味に大きく開き、内面の底と体部境に段をつくる。また外面の口縁端部付近に強い回転痕がみられる。6 は 27 区の S K 13 から出土し、体部は内湾気味に立ち上がり、丸くおさめる口縁部へと続く。内面の底と体部境に段をつくり、外面にはタテのハケ目がみられる。

7 は白磁皿と考えられるもので、20 区の 2～3 層から出土したもの。ゆるく内湾して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。釉調は灰白色を呈し、中世前半と推定されるもの。8 は 23 区の S K 07-2 に共伴するもので、釉調は灰オリーブ色を呈する 12 c の龍泉窯系青磁皿 I 類である。体部から口縁部にかけて外傾して開き、内面の底と体部境に段を有する。24 区の 2 層上面から出土した 9 は、釉調は灰白色を呈する同安窯系のもので、底部から体部へは内湾気味に逆「ハ」字状に開き、高台は逆台形を呈する。外面には放射状にクシ状文、内面には圏線がみられる。

10 は須恵器の壺である。1 区の 2～3 層から出土したもので、胎土は灰色を呈し、内外面ともにナデを呈する。口縁部は逆「ハ」字状に開き、ナメ上下に拡張する口縁部へと続いている。11 は面質土器の摺鉢で、2 区の 3 層上面から出土したもの。体上部は逆「ハ」字状に大きく開き、肥厚した平坦面をもつ口縁部へと続く。平坦面には凹線をもち、また内外面にはナデを呈して、外面に 5 条以上のスリ目が見られる。色調は灰褐色を呈し、防長系で中世後半のものと考えられる。

12～14・16・17 は中世の土師質土器で胎土は密、また 12 (図版 6・8) は皿、13・14 (図版 3・2) は杯、16 は鉢、17 は把手で色調は 17 の灰白色以外は淡黄橙色を呈する。

このうち 28 区の P01 に共伴する 12 の底部・体部の境稜は浅くしぼり、内湾して大きく体部が開く。



第14图 出土遺物実測図(1)

また口縁部は強く内湾し、外面底部には回転糸切り痕、体部には回転ナデが認められる。13は15区P01に共伴するもので平底であり、底と体部境に稜をつくる。内外面に回転ナデが施され、外面底部には回転糸切り痕がみられる。また14は同地点出土の同形態のものとなる。16は2区の5層出土で、体下部はやや内湾気味に大きく開きながら立ち上がる。内外面はハケ目とともに、外面にはミガキ・ナデが施される。また17は同区の2層に出土し、先端の欠けた牛角状の把手であり、内面にナデ、外面にハケ目が認められる。

15は瓦質土器の壺で、20区のP05に共伴するもの。頸部は「ハ」字状に立ち上がり、口縁部は「く」字状に屈折する。口縁端部は肥厚して、頸部と体部境に幅広い突帯を巡らし、また内外面とも回転ナデを施している。色調は黒灰色を呈する。

18～20は磁器の碗で、18は20区の3層、19は2区の2層上面、20(図版3-3)は20区のP03からの出土品となる。18は体部から口縁部へ逆「ハ」字状に開き、釉調は青白色、胎土は乳白色を呈する。外面には逆「L」字状の線文及び内面には口縁部に2条の平行線文を施す。陶胎染付の19は、体上部が逆「ハ」字状に開き丸くおさまる口縁部へと続くもので、胎土は灰白色で釉調は明灰オリーブ色を呈する。20の高台は高く僅かに内傾する。底と体部の境は強く内湾し、体部は直立して小さく外傾する。また内面には胎土目もち、圏線及び中央に草文を施す。胎土は乳白色で釉調は青白色を呈し、時期は18cのものとして推定される。

21～26は肥前系陶器の皿及び碗(坏含む)であり、胎土は灰色を呈している(第15図・第2表)。21・22は20区の2～3層、23は2区のSD01-3、24(図版5-4)は27区のSK13-PO2、25は17区の2層上面、26は27区の2層上面から出土している。このうち21は釉調が灰オリーブ色を呈し、体部は内湾して立ち上がり、口縁部はごく僅かに内傾しているもの。22は青磁碗で、僅かに内傾気味に逆「ハ」字状に開くもの。23は17cの皿で、体部は短く内湾して立ち上がり、丸くおさまる口縁部へと続いている。また24は釉調が明茶褐色を呈する坏である。底部はレンズ状に小さく膨らみ、体部はほぼ直角に折れて移行する。さらに体部から口縁部へは直立し、内外面とも回転ナデが施され、江戸期のものと推定される。25は内面に胎土目を有する青磁碗で、底と体部の境はゆるく内湾する。26は向付皿で、釉調は灰オリーブ色を呈する。体部から口縁部は内湾して立ち上がり、端部は波状の捺りを呈している。

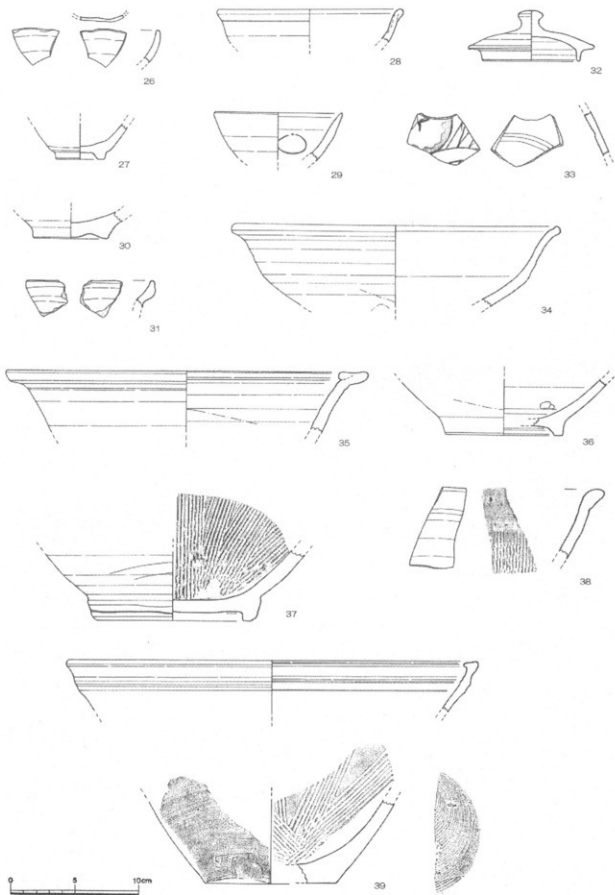
27～29は国産陶器の碗で、27・28は20区の2層上面、29は27区の2層上面から出土している。27の高台はやや低く、断面は逆台形を呈する。底と体部の境に稜をつくり、体部は逆「ハ」字状に開いている。釉調は黄土色で、外面には回転ナデを施して底部は無軸、内面には胎土目がみられる。28の釉調は灰白色で、外面には回転ナデを施し、体部はゆるく内湾して開いて、口縁部は玉縁状を呈する。29の体部から口縁部は内湾気味に逆「ハ」字状に大きく開き、端部は内面を抑え片刃状に仕上げている。釉調は灰オリーブ色を呈し、内面には貝土目がみられる。

30は27区の5層P03から出土した朝鮮王朝の雑釉陶器碗である。厚重な碗底部を呈し、高台内には削り出しが施される。二次的被熱がみられ、施釉は高台内までみられる。胎土は密で浅黄橙色、外面の釉調は(青)灰色、内面は灰白色を呈するもの。31は2区の2層から出土した須恵器の鉢である。中世のものと推定されるが、内外面にナデを施し、風化が著しく、玉縁状の口縁部を有する。

32～40は国産陶磁器で、このうち33・34は磁器となる。32は19区の3層P01から出土した蓋、33は1区中央部・5層上面からの徳利、34・36は1区北半部・2～3層からの鉢、35は20区・2～3層からの鉢、37(図版5-3)は16区・SK04からの搦鉢、38は20区・2層上面からの搦鉢、39は13区・SK01からの搦鉢、40は20区・2層上面からの半調である。

32は大き目の乳頭状のつまみもち、天井から体部裾端部へは湾曲気味になだらかに下降する。身受け部は高く直立する。内外面とも回転ナデを施し、釉調は茶褐色で内面は無軸となる19cのもの。33は伊万里焼で、体部は逆「ハ」字状に開き、内面に巾広の溝がみられる。外面には施文とともに、釉調は青白色、内面は灰白色、胎土は灰白色を呈し、18cのものとして推定される。34の釉調は内外面とも灰

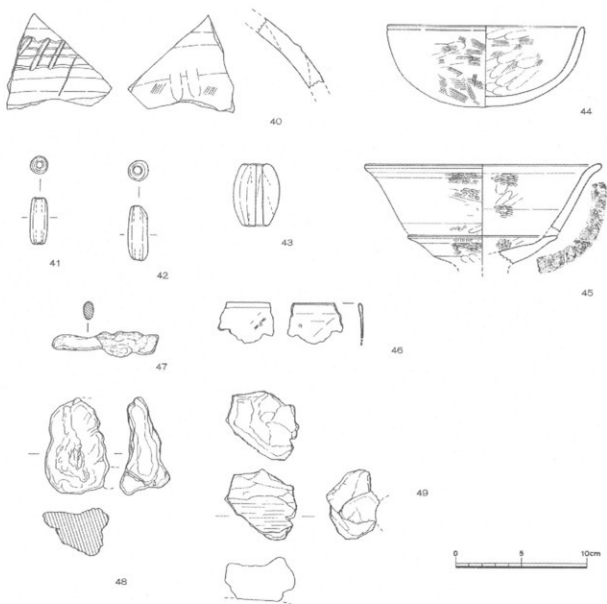




第15图 出土遺物実測図(2)

黄色（オリーブ黄色）を呈し、産地等は不明であるもの。底部から体部は内湾気味に逆「ハ」字状に開き、口縁部はさらに外反する。35の体部は逆「ハ」字状に開き、口縁部は「T」字状に左右に肥厚・拡大するもの。内面にはロクロ目がはっきりと残り、釉調は浅黄色、胎土は灰白色を呈して、19cのものと推定される。36の体部は逆「ハ」字状に開きながら立ち上がり、高台部は巾広く、内面には重ね焼跡が残る。胎土は褐灰色、釉調はオリーブ灰色を呈する。

37は須佐焼の高台付播鉢で、18cのもの。体部は逆「ハ」字状に開き、外面はサビ釉が施釉されてナデを呈し、内面はスリ目が11条以上みられる。胎土は浅黄褐色、釉調は内外面とも黄褐色を呈する。38の釉調は褐色を呈し、体部は逆「ハ」字状に開いて、口縁部は外傾・肥厚する。江戸中期（18c）のものと推定される。39は唐津焼の播鉢で平底であり、体部は逆「ハ」字状に開き、口縁端部は左右に肥厚・拡大するもの。平底面には回転糸切り痕がみられ、内面には8条1単位のスリ目が施される。色調は黄褐色を呈する17c前半～中頃のもの。40は半胴（大甕）の体上部（肩部）で、形態は内傾・内湾する。外面は低い2段の突帯に「RL」の太い凹線を等間隔で施し、内面はハケ、回転ナデ、指ナデ痕がみられる。胎土はにぶい黄褐色で、外面の釉調はオリーブ灰色、内面は灰黄褐色を呈し、近世～近代



第16図 出土遺物実測図(3)

(19c) のものと推定される(第16図・第2表)。

41・42は2区・2～3層上面出土の管状土錘(土師器)であり、前者は中央がやや膨らみ、長さ3.5cm、後者は長さ4.1cmを測っている。色調は41は淡黄褐色、42は淡黄橙色を呈して、いずれも焼成は良好な中世期のもの。43は陶製の漁網錘であり、太い樽形を呈する。色調は黒褐色を呈し、軸は網孔内までかかる19cのもの。

44は23区・5層中位面から出土した土師器の坏である。形態は盃形を呈し、底部は丸味をもって内湾しつつ体部に移行する。口縁部は小さく外傾して開き、また内外面ともナデ・ハケ調整がみられる。色調は赤褐色を呈して、時期は古墳時代中期(5c)のものと推定される。45は21区・SX03に共存する土師器の高坏である。坏下部は「ハ」字状に大きく開くのちにやや屈曲し、逆「ハ」字状に開きながら立ち上がり、外反する口縁部へと続く。内外面ともナデ・ミガキが施されるとともに、外面はハケ・指頭痕もみられる。色調は明黄褐色を呈し、古墳時代中期(5c)のものと推定される。

46(図版5-4)は27区・SK13-P01に共存する銅鍍と推測されるもの。口縁部は小さく肥厚し、頸部に沈線をもつ。体部はゆるく内湾し、色調は灰オリーブ色を呈して部分的に緑青が付着する。また二次的な穿孔をもち、外面には擦痕がみられる。

47は27区・3層上面から出土した錆の付着する鉄器で、刀子と推定されるもの。48は20区・2層上面から出土した鉄滓で、鍛冶に伴う小型のものである。49は2区・5層上面から出土した小鍛冶に係る羽口である。スサ等の混入はなく、孔径は約2.5cmを測っている。

なお土器・陶磁器の分類及び編年等については、下記文献を参考としている。

- 参考文献：島根県教育委員会 2007『浜奇・地方遺跡』-1H・1J・2B・2D・2E 各区の調査-  
島根県教育委員会 1992『石見空港建設予定地内遺跡 埋蔵文化財発掘調査報告』  
島根県教育委員会 1995『埋蔵文化財発掘調査報告書1』  
(鹿伏山・半田浜西・二宮C遺跡・久本奥窯跡)  
山陰考古学研究会『山陰における中世前期の貿易陶磁器』1998年8月  
中世土器研究会『概説 中世の土器・陶磁器』1995年12月 真陽社  
大庭康時・佐伯弘次ほか『中世都市・博多を掘る』2008年3月 海鳥社  
江戸遺跡研究会 2001『江戸考古学研究事典』柏書房  
島根県教育庁埋蔵文化調査センター 2001『石見焼関連遺跡調査1』

図版及び遺物番号	種別	器種	口径(底径)cm	出土地点	備考	
第十四図 出土遺物実測図(一)	1	白磁	碗	13.2	21区・SX02	薄灰オリブ色・IV類(12c)
	2	青磁	碗	-	23区・SK07-2	オリブ灰色・龍泉窯系(12~13c)
	3	青磁	碗	(6.8)	2区トレンチ・5層上部	オリブ灰色・龍泉窯系1類
	4	青磁	皿	10.6	28区・4層下面	オリブ灰色・同安窯系1類(12c)
	5	青磁	皿	10.4	24区・2層上面	オリブ灰色・同安窯系1類(12c)
	6	青磁	皿	-	27区・SK13	オリブ灰色・同安窯系
	7	白磁?	皿	9.0	20区・2~3層	灰白色・中世前半?
	8	青磁	皿	-	23区・SK07-2	灰オリブ色・龍泉窯系1類(12c)
	9	青磁	碗	3.8	24区・2層上面	灰白色・同安窯系
	10	須恵器	壺	-	1区・2~3層	灰色・古代
	11	瓦質土器	灌鉢	28.0	28区・3層上面	灰褐色・防長系(中世後半)
	12	土師器	皿	8.0(4.8) 高さ1.9	28区・P01(5層上面)	浅黄褐色(中世)
	13	土師器	坏	(6.8)	15区・P01	淡黄褐色(中世)
	14	土師器	坏	(6.3)	15区・P01	淡黄褐色(中世)
	15	瓦質土器	壺	21.0	20区・P05	黒灰色
	16	土師器	鉢	-	2区・5層	淡黄褐色・変器(中世)
	17	土師器	把手	-	2区・2層	灰白色・三角形(中世?)
	18	磁器	碗	12.0	20区・3層	青白色
	19	磁器	碗	-	2区・2層上面	明灰オリブ色・胸筋染付
	20	磁器	碗	(5.0)	20区・P03	青白色・筋土目(18c)
	21	陶器	碗	9.8	20区・2層上面	灰オリブ色・肥前系
	22	陶器	碗	-	20区・2~3層	灰オリブ色・肥前系
	23	陶器	皿	11.8	2区・SD01-3	灰オリブ色・肥前系(17c)
	24	陶器	坏	11.8	27区・SK13-P02	明茶褐色・肥前系(江戸)
	25	陶器	碗	-	17区・2層上面	灰オリブ色・肥前系
第十五図 出土遺物実測図(二)	26	陶器	皿	-	27区・2層上面	灰オリブ色・向付皿(波状の捺り)・肥前系
	27	陶器	碗	(3.8)	20区・2層上面	黄土色
	28	陶器	碗	14.2	20区・2層上面	灰白色・玉縁状口縁
	29	陶器	碗	9.8	27区・2層上面	灰オリブ色・貝土目・肥前系
	30	陶器	碗	(5.8)	27区・P03(5層)	灰白色・二次的被熱か・朝鮮王朝
	31	須恵器	鉢?	-	2区・2層	灰白色・玉縁状口縁(中世)
	32	陶器	壺	9.8 高さ4.0	19区・P01(3層)	茶褐色・(19c)
	33	磁器	徳利	-	1区中央部・5層上面	灰白色・伊万里(18c?)
	34	磁器	鉢	25.0	1区北半部・2~3層	灰黄色(オリブ黄色)
	35	陶器	鉢	17.6	20区・2~3層	浅黄色・19c
	36	陶器	鉢	(9.0)	1区北半部・2~3層	オリブ灰色
	37	陶器	灌鉢	(12.0)	16区・SK04	黄褐色・須佐焼(18c)
	38	陶器	灌鉢	-	20区・2層上面	褐色・江戸中域(18c)
	39	陶器	灌鉢	31.6(11.2) 高さ17.0	13区・SK01	黄褐色・唐津焼(17c前半~中)
第十六図 出土遺物実測図(三)	40	陶器	半胴	-	20区・2層上面	オリブ灰色(灰黄色)・19c
	41	土師器	土鉢	長さ3.5 幅1.3	2区・2層上面	淡黄褐色
	42	土師器	土鉢	長さ4.1 幅2.0	2区・3層上面	淡黄褐色
	43	陶器	鉢	長さ4.7 幅3.5	20区・2~3層	黒褐色・19c
	44	土師器	坏	14.4	23区・5層中位面	赤褐色・古墳時代中期(5c)
	45	土師器	高坏	18.0	21区・SX02	明茶褐色・古墳時代中期(5c)
	46	銅碗?	碗?	-	27区・SK13-P01	灰オリブ色・二次的穿孔・緑青付着
	47	鉄器	刀子?	-	27区・3層上面	錆化
	48	鉄滓	鍛冶滓	-	20区・2層上面	-
	49		羽口	-	2区・5層上面	孔径約2.5cm

第2表 実測遺物観察表

## 5. 小 結

本遺跡は高津川中流域右岸の山地寄りに立地し、蛇行する河川によって形成された平野部に位置している。周辺には周知遺跡も多く、中小路遺跡・羽場遺跡・安富（王子台）遺跡・家下遺跡などは原始・古代～中世に係る顕著な遺跡として注目されるものである。

このように遺跡に囲まれた本地点城は古來からの生活好地であり、いわゆる要地もしくはそれに準ずる場所であったと推測できる反面、立地的にみて洪水等の河川による影響も甚大であったと想像できる場所でもある。

ここで遺跡を概略すると、遺構は大別して3・4層の近世面及び5層の中世面から柱穴状・土坑状などのものが55基検出され、各層に近世以降の国産陶磁器類・鉄滓、土師質土器・貿易陶磁器類・瓦質土器などの遺物が伴うことから、集落遺跡と確認されたものである（第17図）。

1区の北半部には近世以降の石列が検出されたが、中央部から南半部にかけては希薄であり、道路等の開発により削平・破壊された傾向が看取された。また2区は南城の5層面に集中して遺構が検出されて、南～南西側に中世集落の形成を予測させるものであった。但し、28区～12区までの建物基礎の北～北東城までには遺構は全く検出されず、また部分的に5層下位に円礫が充填して汚れる土層が確認される反面、13区～27区までの南～西城に近世及び中世の遺構が集中して検出されることは、当該期に係る集落の形成を物語っているといえる。

このことから中世面の構築以前には、東から西方向へ河川の流路変更もしくは洪水橋によって当該層の形成（堆積）が行われた後に、仮説として中世集落が2区から建物基礎南城までの広域に展開するものの、同方向からの度重なる洪水橋によって次第に集落が分断していったのではないかと想像している。

但し、近世遺構も確認されていることから、断続的にでも人間の営みを示唆するものであり、恐らくは高津川の西側への流路移動に伴って形成された肥沃な農耕地帯においては、生活好地としての条件を十分に備えてきたものと推測している。

こうして、横田地区の先人の営みを識る多くの資料を得られたことは本発掘調査の成果といえ、このたびの所見をもってひとまずの小结に代えるとともに、更なる地域史の解明について今後の調査・研究に期待するものである。





1. 調査前状況（北から）



5. 13区 遺構検出状況（4層下面）



2. 調査前状況（西から）



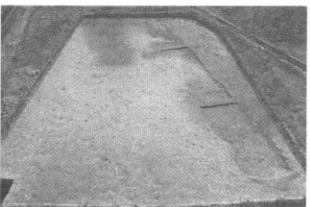
6. 14区 遺構検出状況（4層上面）



3. 1・2区 表土掘削状況



7. 15区 遺構検出状況（4層上面）



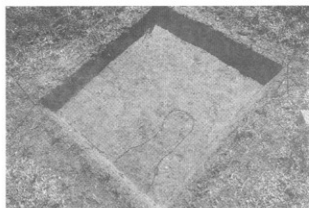
4. 遺構検出状況（2区・3層上面）



8. 16区 遺構検出状況（4層上面）



1. 17区 遺構検出状況 (3層上面)



5. 23区 遺構検出状況 (4層中面)



2. 18区 遺構検出状況 (4層上面)



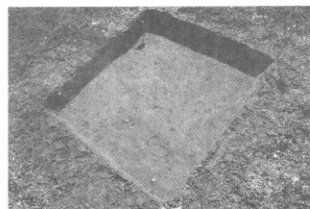
6. 25区 遺構検出状況 (4層上面)



3. 19区 遺構検出状況 (4層上面)



7. 26区 遺構検出状況 (4層上面)



4. 22区 遺構検出状況 (4層中面)



8. 27区 遺構検出状況 (4層中面)





1. 1区 北半部の石列検出及び完掘状況（北から）  
B層（淡茶灰色土）上位面



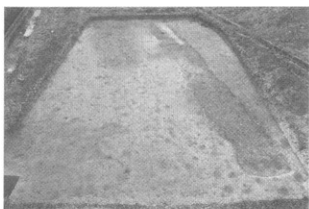
2. 共伴遺物（土師器）検出状況（15区）



3. 遺物出土状況（20区・4-A層攪乱層）



4. 遺物検出状況（28区・4層下面～5層上面）



5. 遺構完掘状況（2区・3層上面）



6. 13区 遺構完掘状況



7. 14区 遺構完掘状況



1. 15区 遺構完掘状況



5. 19区 遺構完掘状況



2. 16区 遺構完掘状況



6. 22区 遺構完掘状況



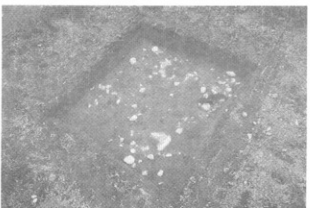
3. 17区 遺構完掘状況



7. 23区 遺構完掘状況



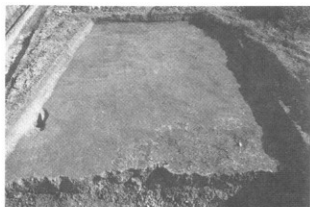
4. 18区 遺構完掘状況



8. 25区 遺構完掘状況



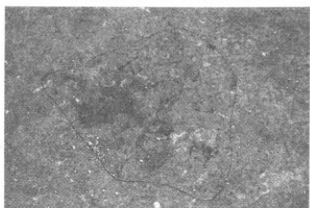
1. 26区 遺構完掘状況



5. 2区 遺構検出状況 (5層中位面:北から)



2. 27区 遺構完掘状況



6. 遺構表出状況 (2区:SK19:5層中位面)



3. 共伴遺物 (播鉢) 検出状況 (16区)



7. 13区 遺構検出 (5層中面)



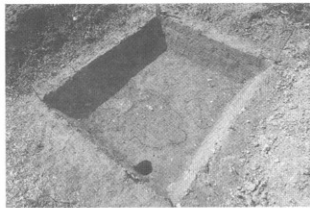
4. 共伴遺物 (金属器・陶磁器) 検出状況 (27区)



8. 14区 遺構検出 (5層上面)



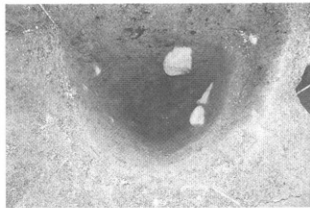
1. 21区 遺構検出 (5層上面)



5. 27区 遺構検出 (5層中面)



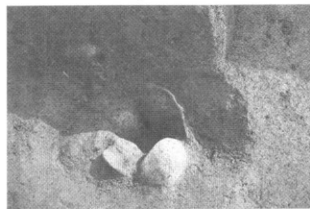
2. 22区 遺構検出 (5層中面)



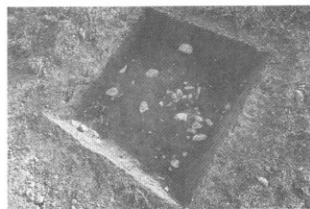
6. 共伴遺物 (土師器) 検出状況 (13区)



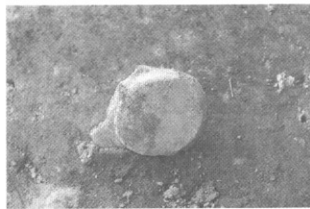
3. 23区 遺構検出 (5層中面)



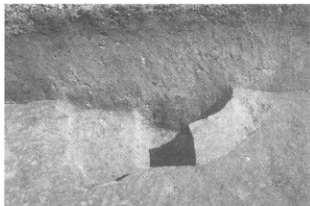
7. 共伴遺物 (土師器) 検出状況 (21区)



4. 24区 遺構検出 (5層中面)



8. 共伴遺物 (土師器) 検出状況 (28区)



1. SK14 完掘状況 (2区)



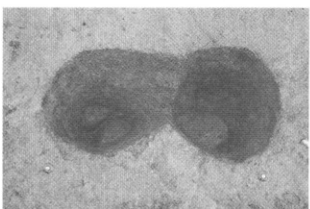
5. 1区 中央部の土層堆積状況 (南から)



2. 遺構完掘状況 (2区:北から)



6. 1区 南半部の土層堆積状況 (南から)



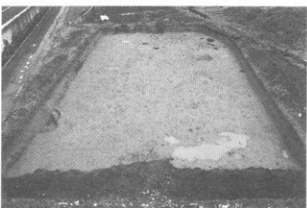
3. 遺構完掘状況(2区:P24・25)



7. 土層堆積状況 (2区西壁:北から)



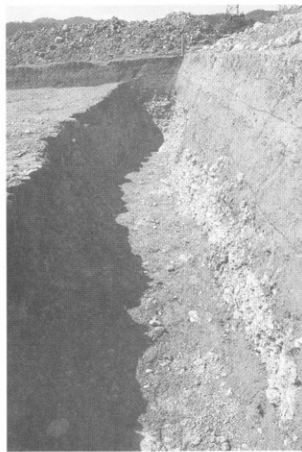
4. 1区 北半部の土層堆積状況 (南から)



8. 2区 完掘状況 (北から) 5層中位面



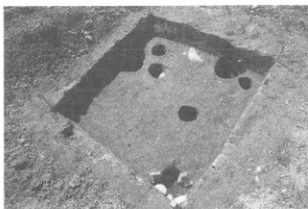
1. 1区 中央部の完掘状況（南から）5層上面



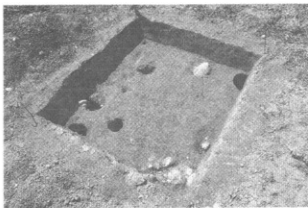
3. 北端トレンチ掘削及び土層堆積状況（2区北壁：東から）



2. 1区 南半部の完掘状況（南から）5層上面



4. 13区 遺構（調査区）完掘状況



5. 14区 遺構（調査区）完掘状況



1. 21区 遺構(調査区) 完掘状況



5. 27区 遺構(調査区) 完掘状況



2. 22区 遺構(調査区) 完掘状況



6. 3区 調査区完掘状況



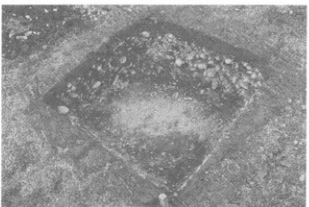
3. 23区 遺構(調査区) 完掘状況



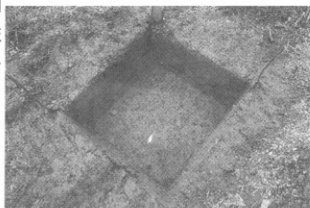
7. 4区 調査区完掘状況



4. 24区 遺構(調査区) 完掘状況



8. 5区 調査区完掘状況



1. 6区 調査区完掘状況



5. 10区 調査区完掘状況



2. 7区 調査区完掘状況



6. 11区 調査区完掘状況



3. 8区 調査区完掘状況



7. 12区 調査区完掘状況

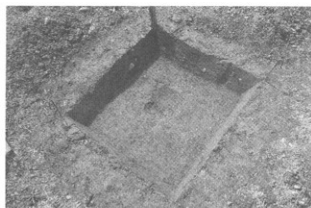


4. 9区 調査区完掘状況



8. 15区 調査区完掘状況





1. 16区 調査区完掘状況



5. 20区 調査区完掘状況



2. 17区 調査区完掘状況



6. 25区 調査区完掘状況



3. 18区 調査区完掘状況



7. 26区 調査区完掘状況



4. 19区 調査区完掘状況



8. 28区 調査区完掘状況



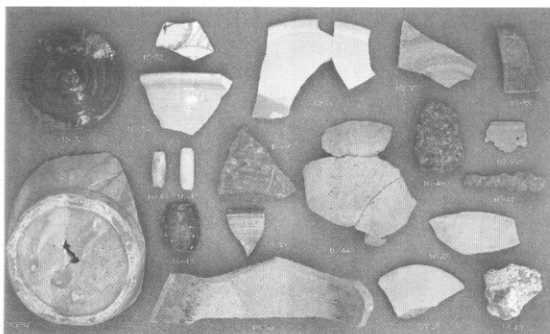
1. 29区 調査区完掘状況



2. 30区 調査区完掘状況



3. 実測遺物 1



4. 実測遺物 2

## 報告書抄録

ふりがな	こうなりいせき							
書名	河成遺跡							
副書名	コメリ H&G 西益田店開発事業に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編集者名	山本 浩之							
編集機関	益田市教育委員会							
所在地	〒698-8650 鳥根県益田市常盤町1番1号 TEL0856-31-0623							
発行年月日	2012年3月30日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査 原因
		市町村	遺跡 番号					
河成遺跡	鳥根県 益田市 横田町	32204		34° 38' 7.9"	131° 47' 53"	2010.8.22 ～ 2010.10.13	358㎡	民間 開発 事業
遺跡名	種別	主な 時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
河成遺跡	集落跡	(古代) 中世・ 近世	柱穴状・ 土坑状・ 不明遺構	土師(質土)器 国産陶磁器 貿易陶磁器 須恵器・瓦器 鉄滓・羽口 ほか				

### 河成遺跡

—コメリ H&G 西益田店開発事業に伴う発掘調査報告書—

平成24年3月発行

編集・発行 益田市教育委員会

鳥根県益田市常盤町1番1号

印刷 西村印刷所

鳥根県益田市高津六丁目27番8号